

保護の時

ラクシャー・バンダン

イーシャ・サーデサイ

シッダ・ヨーガの道におけるこの1カ月、私たちはグルマーイが与えてくれた瞑想とマントラ・ジャパに焦点を当てた修行に取り組んできました。具体的には8月の祝祭日——まず、バガヴァーン・ニッティヤーナンダのプンニャティティ、次にバーバ・ムクターナンダのディヴィヤ・ディークシャー、そして今、ラクシャー・バンダン——と関連させて、これらの修行を行ってきました。

ラクシャー・バンダンは満月、すなわち「ラーキー・プールニマー」に行われ、今年は8月 27 日にあたります。今月初めにも書きましたが、ラクシャー・バンダンは、インドの文化や教典の伝統に深く根差した祝祭で、神や女神たち、王や王妃たち、その他個人や集団が、ラーキーと呼ばれる糸で作られた腕輪を交換したさまざまな話が記されています。現代、インドで広く行われている慣習は、ラクシャー・バンダンの日に、姉妹が兄弟の手首にラーキーを結びます。

こうして何千年もの間、ラーキーは人々の間の敬意と、互いを守るという約束を象徴する力強いシンボルとして機能してきました。シッダ・ヨーガの道において、ラーキーはグルと弟子の間の愛と保護の絆を表しているため、その象徴性は特に深い意味を持ちます。そして、私たちが具体的に何を守りたいのかは、熟慮する——そして明確に言葉にする——価値があります。それは、グルが私たちの内に目覚めさせた光であり、自分自身の内なる神性への気づきです。それはまた、他

者の中や私たちを取り巻く世界の至る所にも映し出されているのを見いだすことができるものです。それは、心の中の愛との直観的なつながりの感覚であり、シッダ・ヨーガの修行を通して私たちが強めていくものです。

英語の protection という言葉は、古フランス語の proteccion (「保護、盾」の意) に由来し、これはさらに後期ラテン語の「覆い」を意味する protectionem に行き着きます。私はこれを、瞑想の修行とその成果を見る上で示唆に富む視点だと感じています。私自身の体験では、シッダ・ヨーガの瞑想を実践するたびに、私たちは大いなる自己の、内なる炎の認識を強めていると実感してきました。ある意味で、私たちはその認識を守り——それを忘れさせるような内的・外的な力から防御し、徐々にそれらの影響を受けないように保護しているのです。サムサーラの波は私たちを激しく揺さぶろうとするかもしれませんが、私たちは自分自身に、グルが私たちに授けたものに、しっかりと根を下ろし続けます。

これは私を、あの一見するとシンプルな糸の腕輪であるラーキーに戻します。忘却は私たちが警戒しなければならない非常に現実的な危険であるため、保護を思い出させる物理的で目に見えるものを持つことは、有益で安心感を与えてくれます。実際、インドには保護の糸についての豊かな歴史があります。特定の宗教儀式では、僧侶や年長者が、マウリと呼ばれる黄色と赤色の糸を編み合わせて作った腕輪を信奉者の手首に結び、邪悪な力を遠ざけます。同様に、子どもたちの手首に黒い糸を結ぶこともよくあります——これも一種のお守りとして、ブリー・ナザル、つまり「邪悪な目」を追い払うためのものです。

シッダ・ヨーガの道では、グルマリーが記憶を支える護符、スマラニカーについて話したことがあります。私たちがグルとの絆を認識するために結ぶラーキーは、そうしたスマラニカーの一つになり得ます。シッダ・ヨーガの道におけるもう一つの重要なスマラニカーは、マントラ・ジャパの修行に用いるジャパ・マーラーです。ジャパ・マーラーの玉を一つひとつ繰るごとに、私たちはマントラを心の中で繰り返し、至高なる自己が自分の心の中に存在することを何度も何度も確認します。このような物理的なもの——腕輪、あるいは指輪のマーラー——を身に着けていることには大きな力があります。それはジャパの実践を、そしてジャパをすることで得るものや守るものを、絶えず思い起こさせてくれます。

それはまた、「広げていきたい」と私たちが願う保護を思い出させてくれるものでもあります。私の体験では、マントラ・ジャパと瞑想を実践することで呼び起こす保護は自分自身だけにとどまるものではありません。それは波紋のように外へと広がり、私たちが出会うあらゆる人、関わるあらゆるものを包み込むのです。

